

「実践報告」論文の書き方

一般社団法人日本LD学会編集委員会
(第21回大会:編集委員会企画研修より)

目次

- 「実践報告」論文投稿のお願い
- 投稿論文の種類
- 「実践報告」とは
- 投稿論文について
- 報告者の倫理
- 文章を書くということ
- わかりやすい文章を書くために
- 論文の書き方(構成)
- タイトルについて
- 1. 問題と目的
- 2. 方法
- 3. 結果
- 4. 考察
- 先行研究の結果と比較
- まとめ(今後の課題)
- 今後の課題
- 文献の書き方(投稿規定より)
- Q&A

「実践報告」論文投稿のお願い

- 一般社団法人日本LD学会機関誌「LD研究」に、「実践報告」論文の投稿を、ふるってご応募ください。
- 「実践報告」は、LDの教育、評価、相談、診療などに携わる方々が、日々の実践で試みた事柄の方法とその結果を整理し、意味づけ、広く読者と共有することを目的とします。

投稿論文の種類

- **原著論文** (LD等に関する独創的・実証的な研究論文、問題提起、研究成果、理論的考察、明確な結論を備える)
- **短報** (原著論文に準ずるが、萌芽的な研究あるいは主要なテーマに付随するような論文)
- **資料** (つい指摘研究のような、独創性はないが資料的価値のある論文)
- **総説** (ある研究テーマ、研究領域の動向についてまとめたもの(研究のレビュー))

「実践報告」とは

- 「実践報告」には、事例報告、指導法の検討、評価法の検討、学校で特別支援教育の取り組み、地域のネットワークづくり、親の会の活動などが含まれます。
- 特に教育現場における実践報告を歓迎します。

投稿論文について

- 投稿された論文は、編集委員会による査読に基づき、論文の構成や内容に修正を求められることがあります。また、掲載される「実践報告」論文には、さらにその展開を促すためにコメントをつけることがあります。
- 論文は、学会誌掲載の投稿規定にそって執筆、投稿してください。

報告者の倫理

- 事例報告では、個人や集団が特定できないように配慮してください。
- 個人の事例報告では、本人、保護者の承諾を得てください。

文章を書くということ

- 楽しみ

自分の考えたことがまとまったかたちで目にみえる。

- 辛さ

産み出す = 新しいものを創る

「完成品」は、自分の頭の中にもない

- 自分を鍛えること

組み立てた論理を、その根拠となるデータを示して、他人に納得してもらえようにする。

わかりやすい文章を書くために

- ひとつの文章に、ひとつの内容
4行以上は長すぎる
- 「主語」と「述語」の関係を明確に
書いたら必ずチェック
- 熱い想い・・・冷めてからチェック
数週間、横に置いておく
他人に読んでもらい、感想やコメントを聴く

- 矛盾したところ、話の筋が通らないところ
をチェック
- 自分で良いと思う文章を真似する。
内容ではなくスタイルを
- 大事なものは、プラン
実践、指導する前に・・・考える
その指導にどういう意味があるのか

- 最初に結論ありき、はダメ
結果を慎重に、そして丁寧に考察
結果を拡大解釈しない
- 目的が大事
目的に沿った方法がとられているか
結果から無理矢理解釈をしていないか
目的に沿った考察をしているか
限界をわきまえているか
- 研究をするにあたっての倫理

論文の書き方(構成)

タイトル

- 1, 問題と目的(はじめに)
- 2, 方法(対象と手続き)
- 3, 結果(経過)
- 4, 考察(まとめ、今後の課題)

文献

※実際の執筆作業は、この順とは限らない

タイトルについて

☆研究内容を適切に、正確に表現しているか？
タイトルから内容がイメージできるか？

「〇〇作業の正確さに及ぼす△△の効果」

「〇〇技能の習得に困難を示す△△障害のある
児童への、××教材を用いた学習支援」

1, 問題と目的(はじめに)

「実践研究」

日常の実践経験から問題意識を導き出す

+ 関連する文献も調べて深める

- ・その研究を、何のために行うのか、どのような意義があるのか
- ・「願い」や「ねらい」を書くことと同じではない
- ・「はじめに」は、実際には、後で書く場合もある

2, 方法(対象と機材・手続きなど)

- 「方法」は、論文の「心臓部」

なぜ

論文の「科学性」を保証するから
(客観性、公共性)

論文の評価に大きく影響する

2, 方法(対象と機材・手続きなど)

どのように

「再現可能性」によって

だから

具体的で、正確な記述を

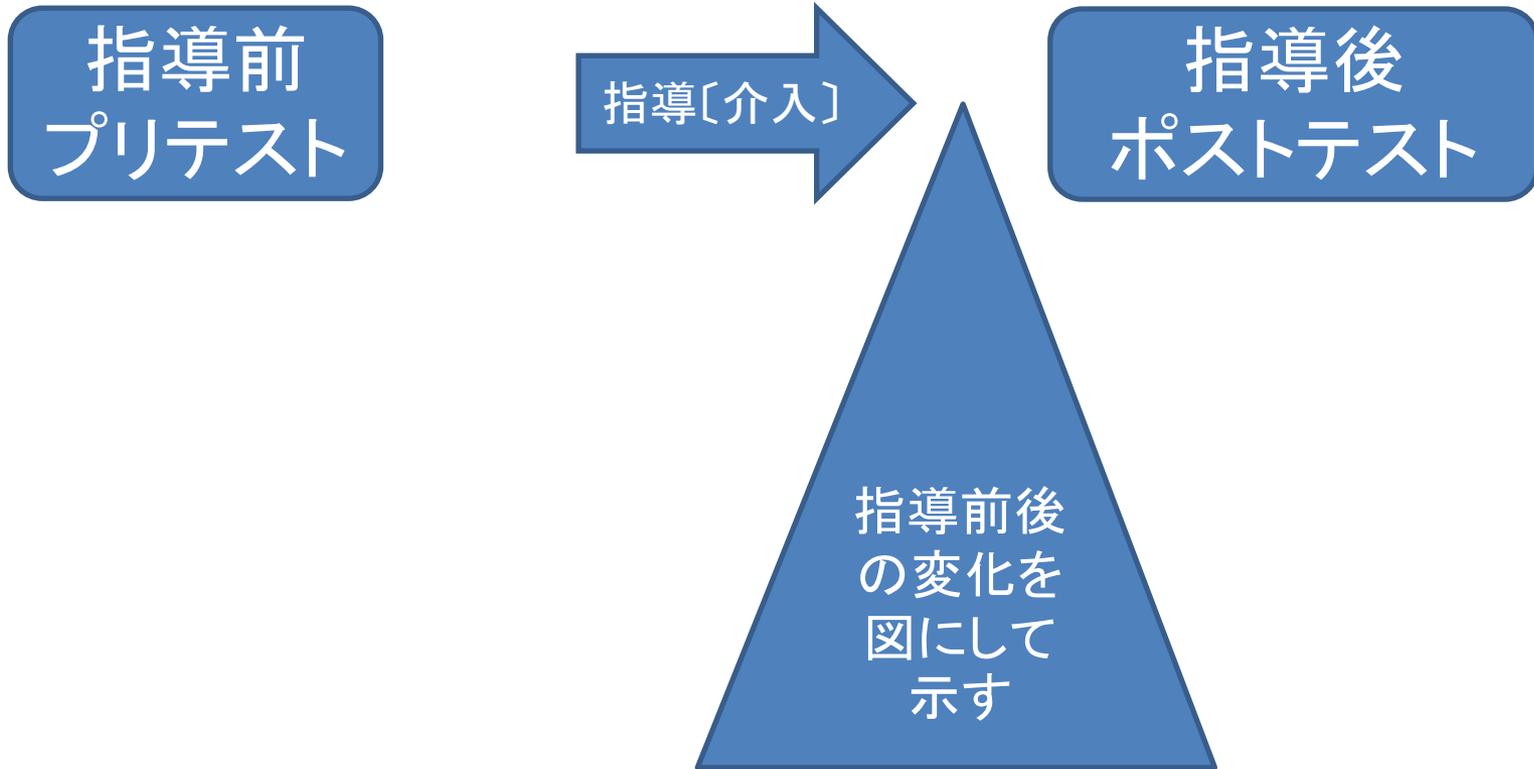
書かれた通りに行えば、
確かめることができる

2, 方法(誰に対して、何を、どうして)

- 誰に(対象者)、どこ(指導の場)で、何を用いて(検査器具、質問紙、教材など)、どのような働きかけ(介入、指導的援助)を行ったか
- 対象者、検査器具、教材等は、正確に、具体的に記述
- 手続きは、読んだ人が、同じことを実行できるように、必要かつ十分に記述

3, 結果(経過)

- 実験的な研究



- 事例研究



指導前後の変化を表にして示す



4, 考 察

- 結果と考察を分ける
- 「実践記録」と「研究報告」とは、異なる考察が必要
- 得られたデータ(量的、質的)に基づいて議論書く人の主張は、データを根拠として論理的に示されるべき

- 先行研究の結果と比較

日本の、世界のどこかで似たような研究をしている。

どのような結果を出して、どのように議論しているか 参考にする

(独りよがりの勝手な解釈をさけるために重要)

まとめ（今後の課題）

- 考察の中に含まれる場合もある

- まとめ

読み手はアウトラインを把握しやすくなる
「目的」と合致した議論になっているか

チェック

今後の課題

- 今後の課題

一つの研究で全てがわかってしまう、ということはない → 何事にも限界

今回の研究では何がわかって、何がわからなかったのか？

わからなかったことを、今後はっきりさせるためには、どのようなことをしたらよいのか

☆論文は著者自身によるオリジナルの論文ですか

☆執筆者が連名である場合、その順序は貢献度を適切に反映していますか

☆他者が作成した材料やプログラムを用いた場合、そのソースは示されていますか

☆不適切あるいは差別的な用語や表現がないかチェックしましたか

文献の書き方（投稿規定より）

- 文献は、本文中に引用したものののみ
- 本文の後に、筆頭著者名のアルファベット順に並べてください。

（引用の表示）

雑誌など逐次刊行物の名称は省略せずに記載

著者名は、3名以下のものは全員、4名以上の場合は、3人目までを全員記載、4人目からは、et al.（または他）と記載

書き方

雑誌の場合

氏名、発行年次、論文題名、雑誌名、巻、
ページ の順に

単行本の場合

著者名(編集者名)、発行年次、書名、
発行所名、発行地(国内は不要)

Q & A

Q: タイトルをどのように書くとよいのでしょうか

A: タイトルは、内容と一致することが大切です。
読者がタイトルを見て、内容がイメージできるものが良いタイトルです。

地名や教室名などローカルなタイトルは、一般性が乏しいと考えられます。

Q & A

Q: 方法のところでは、対象児の実態を、どのように記載すれば良いですか。

A: 対象児が、はじめにどのような状態であったか記述し、指導後、どう変化したのかという観点から記述しなければなりません。アセスメントに、標準検査などの記載があると良いと考えます。

A: 「学年相当の計算スキルにつまずきがみられた」といった記述のみでは、十分ではない。読者が、対象児に対して、共通したイメージがもてない。

例えば、「〇〇という検査を用いたところ、学年の平均と比較して△△の落ち込みがあった」「〇〇レベルの計算問題を実施した際に、〇問中〇問程度の正答率だった」

☆対象児の情報は、客観的事実に留める。

Q & A

Q: 結果を記述する際には、どのようなことに注意したらよいですか。

A: 指導を行った結果についての記述では、どのくらい当初みられていた誤りが減ったのか、どのくらい処理の速度が上がったのか 等客観的な根拠を記述していきます。

Q & A

Q: 「指導の効果があつた」とまとめていきたいのですが、どのような結果の書き方をすると論文としてまとまりますか。

A: 指導前と指導後に、何か変化が起きていることを証明することです。

指導前テスト(プレテスト)を取って置き、指導後に、内容が同じか、難易度が等価である指導後テスト(ポストテスト)を行い、その違いを比較する。

A: 数値化できるものであれば、数値化できると最も客観性が強くなります。(統計的な処理が必要になることもある。)

数値化できないものは、主観的な意見と受け取られることもあるので、「アンケートにする」「複数名で分析して、一致度を確かめる」等工夫が必要です。

☆万人に納得してもらえるような、論理展開・工夫が必要

Q & A

Q: 考察の記述では、引用文献を用いないとい
けないのでしょうか？

A: 先行研究を引用するのは、自分が行った研究について、説得力を高めるといった意味があります。

自分の解釈だけで結論づける⇒読者が、妥当性や信頼性についての判断がしづらい。

A:「過去の研究でも同様の結果が得られていた」
「〇〇も指摘するように」というように、書くことで自分の思いや考えだけではなく、過去の論文と同様のことが指摘できる。

「過去の研究では〇〇しかわからなかったが、今回の研究で△△まで明らかになった。」と
先行研究と比較して、更なる進歩があった 等
異なる筆者の論文からも引用できる。

☆自分の研究に肉付けしていくことが重要

日々の実践を、論文にまとめてみましょう。

